

川上弘美 遠い旅



五年前に『伊勢物語』の現代語訳を終えた時にいちばん強く思ったことは、この歌物語における「昔、男」の、「男」と目される在原業平ありわらのなりひらという男がわからない、ということだった。

現代語訳をするためにかなり読みこんだので、「男」のことは、かなり知ったはずだった。なかなか、いい男である。女にもてるだけではなく、男にも好かれる人間であり、仕える主を心から慕う純粹さも持ち合わせている。それなのにわからなかったことは、なぜ業平はまるで光源氏の原型のように女たちと奔放に関係を持ち得るのか、またそれをなぜ女たちが許すのか、ということだった。

業平は、光源氏ほど華やかな存在としては描かれていな

い。『伊勢物語』は、ごく短い百二十五の段からなるもので、『源氏物語』のような強度はない。けれど、つぶさに物語の中の和歌を読み、そつげなくも思われる短い文章を読んでゆくと、そこには、和歌や文章の表面にあらわれきっていない、男女のさまざまな感情の彩りがひそやかに隠されていることに気がつかざるを得ない。わたしは、業平の表層的な行動や性格を知ることができたが、それらの奥に隠れている男と女のいとなみの不思議を、結局訳し終えてからも完全には解くことができなかったのだ。

業平の女性関係は、光源氏の最盛期のものとは少しばかり様相を異にする。たまたま出会った女の方が業平をくどく場面が多くあるし、業平が女に去られたり愛想をつかさ

NOW
PRINTING



『三度目の恋』
川上弘美 著
(中央公論新社より
今夏刊行予定)

03『竹取物語／伊勢物語／
堤中納言物語／土左日記／
更級日記』
森見登美彦／川上弘美／
中島京子／堀江敏幸／
江國香織 訳

れたりすることもしばしばある。とぼけたエピソードもあれば、年老いた業平が零落したような描写もある。光源氏よりも、人間味の強い人物像ではある。この実在感ゆえにかえってわたしはわからなかったのだと思う。業平の、女たちからの異様な好かれぶりと、業平と積極的にかかわろうとする女たちの気持ちがある。

現代語訳を終えて二年ほどたったころ、日本の古典文学のアーカイブである立川の国文学研究資料館から、古典に触発された作品を書いてみないかという、アーティスト・イン・レジデンスの企画をいただいた。業平という男について、訳し終えてからもずっと考えつづけていたので、すぐに承諾した。業平をモチーフにした小説を書こうと、その場で決めたのである。ただ、『伊勢物語』を現代の男女に置き換えて小説にするという方法や、舞台は平安時代に置き、その中の業平と女たちの関係を今の言葉と表現で書く、という方法では、自分には業平と女たちの謎は解けないとわかっていった。必要なのは、平安を理解する視線ではないのだ。平安を理解できない、という視線を小説の中に持ちこまなければ、結局は業平と女たちの行動を描写するだけに終わってしまう、ここにいるわたし自身の疑問や違和感や共感が、すべり落ちてしまうにちがいない。だからこそ、現代語訳ではできなかつた何かを、小説においては

加えなければならぬのだ。

それから二年間かけて、この『三度目の恋』という小説は完成した。今年の夏ごろに上梓される予定だ。業平と女たちの関係の謎に、ではわたしはどうやって迫ろうとしたのだったか。結論から言えば、平安時代の生活の細部を知り、自分がその中に入っていた時のことを想像してみ、という方法をわたしは選んだのだ。国文学研究資料館に出かけてゆき、千年前の生活をこまかく調べ、研究者の先生方に業平や平安時代についての素朴な質問をし、小説の視点人物である女——業平の正妻の女房——になつたつもりで、朝から晩まで、一月から十二月までの日々を、頭の中でことこまかに辿つてみたのである。

現代語訳をおこなつたにもかかわらず、なんとわたしは平安時代のことを知らなかつたことか。住んでいる屋敷の正確な構造も、何を食べていたかも、親子関係のありかたも、かれらの宗教観も、男女が互いによびかける時の言葉も、男たちの仕事も、女たちの仕事も、子供の教育も、何も知らなかつたのだ。けれど、これらを知るようになるにつれ、まったく理解できなかつた一夫多妻制の中の女たちの感情や、妻と同時に複数の愛妾をもつ男たちの感情が、以前よりもずっと近いものに思えはじめたのである。それはまるで、遠い旅先での滞在のようだった。知らない国の、知らない風俗の中で暮らし、最初は少ししか理解でき

なかつたその国の人々の感情を、共に暮らすうちに、少しずつ少しずつ、見知ってゆく――。

長い旅のすえに、ではわたしは『伊勢物語』の中の男女のことわりを完全に理解できたのかといえ、それはなんともいえない。ただ、現代の「愛」の姿とは趣を異にする平安時代の「愛」があるらしいということだけは、わかつたような気がする。それはわたしにとって、かなり衝撃的

なことであり、このような驚きは、短くはない年月小説を書き続けていた中でもなかなか得られるものではなかつた。書き上げた小説のゲラに今しも朱を入れながら、『伊勢物語』の現代語訳とそれに触発された小説の仕事が運んでくれたこの遠い旅先で、業平との縁の不思議と幸運に感じ入っている次第である。